

●第一章『ボクに立ちションを教えてください！』

「うー…：…いー…：…」

その日の朝早く、友部潤一は、したたかに酔っていた。

彼の友人の下宿で、久しぶりに夜通しで飲んだのだった。

さんざん馬鹿話をしながら、スナック菓子や缶詰やタバコを肴に、わざと安い酒をがらがら飲む。はつきり言って悪酔いの極致であり、体にいい事なんて一つもない飲み会だった。

だが、彼にはそれがいいのだ。たとえば会社の同期連中と、勤務後に居酒屋に行くとしよう。確かに、潤一と年は近いし、同じ趣味の社員もいる。それなりに話は弾むが、やはり彼らは仕事仲間であって、友人ではない。そこはかとない遠慮というものが出るし、個人的なことをとことんまで話し合えるわけでもない。

その点、大学時代の友人——本人いわく『大学から引き留められて仕方なく』まだ学生をやっている——は気が楽だ。潤一が就職してからも、電話などで話し合い、大概のことはぶちまけあっている。そんな、ただでさえ気取らない仲に、安酒の泥酔という魔力が加わるのだ。その結果たるや、推して知るべし、であった。

頭の中を、普段のうっぶんの代わりに酒の頭痛で満たして、しばし忘れる。やり方は極端だが、潤一には、これも立派なりフレッシュであった。

大抵は、夜中のワイ談が佳境に入った頃、どちらからともなく――ほとんどの場合、基本的に酒が弱い潤一だが――そのまま寝入って、朝を迎える。目覚ましは、くしやみか、頭痛。さもなくば、不自然な格好で寝たための関節痛。そのまま、モーニングコーヒ―代わりのウーロン茶で、消化不良にあえぐ胃袋に、胃薬を流し込む。後は、垂れ流しのテレビの中、しけたツマミの残りをモソモソ食べながら、抜け殻のように、午前中をぼうっとして過ごす。あるいは、夜明けと同時に自宅に帰って、シャワーを浴びてから改めて寝るかのどちらかだ。

その時の潤一は、後者を選んでいた。早く家に帰って、汗とタバコと酒の臭いを洗い流して、さっぱりして眠りたいと思っていた。この状態だと、軽く夕方ぐらいまで熟睡できる。普段は得られない極上の熟睡を、一刻も早くむさぼりたい。そう思っていた。

「（ふにやははは……楽しみだなあ……）」

空はゆっくり白み始め、見事な朝焼けが、夢うつつの目に鮮やかだった。

「（綺麗だなあ……こういう景色が見られるのも、徹夜飲みの一つ

の楽しみだなよあ……」
潤一は、まだほとんど目覚めていない街の中を、ふわふわと歩いていった。

「あれ？」

その時、下腹部を中心に、体中に鳥肌が走った。
「……くそっ、ビールが残ったのかな……？」

慌ててあたりを見渡す潤一。まずい、と思った。

友人の下宿まで戻るにはもう遠いし、自宅までも同じぐらい距離がある。はっきり言って中途半端なところだ。近くにコンビニもない。ガマンは……出来そうになかった。

この鳥肌の津波は空腹感と似ている。そのココロは、認識したが最後に、加速度的に激しさを増す……だ。

この津波に耐え続けていると、やりたくもないのに、不格好な踊りを踊るハメになる。そしてその先は……やめておいた。あんまり想像したくなかったからだ。

そうだ。たとえ人通りが全くないとはいえ、そんな醜態をさらしたくない。

「1・2・3・4……1・2・3・4……」

足を肩幅に開き、右足を左足の前に出し、左足をクロスさせ右へ。

右足を元の位置に戻し、最後に左足も戻す。これを、四拍子で繰り返す。いわゆる、『ボックス・ステップ』というやつだった。ダンスの基本である。

「1・2・3・4……1・2・3・4……」

「（―――っておい！ 踊ってるよ俺！ 手の振りまでつけて！）」

まさに、鳥肌の津波、恐るべし！ であつた。

「（……だからそんな場合じゃないってばよ！）」

潤一が、この状況を打破する選択肢は二つしかなかった。醜態を末代までさらすか、一瞬の醜態に耐えるか、だ。答えはコンマ何秒で出た。もちろん、後者である。

「（むうっ……！）」

素早く、再び周囲を見渡す潤一。二日酔いでモヤのかかる視覚と聴覚を強引にひっぱたき、潤一は、人間ソナーになつた。

「……」

視界、移動物認めず。

聴覚、異常なし。

よし！

そそくさと近くの電信柱の側まで行き、ズボンのチャックを下ろす。ぼろん、とまろび出たナニは、男の朝の生理現象も相まって、

パンパンだった。

「（おーおー、立派に自己主張してること……）」

後は、出口に向けて、意識をちよつと集中させて……

やがて、潤一のナニから、尿がほとぼしる。見事な弧を描いて、びしゃびしゃと電信柱にぶつかっていき、大きなシミを作っていく。

「（……はあ……ささやかな、しかし、間違いのない至福……！）」

一瞬悩んだ醜態うんぬんの事も忘れ、立ち上る湯気を見ながら、潤一は、ほとんど公園の噴水と化していた。

……その時だった。

「（!?）」

潤一は、不意に人の気配を感じた。

「（まずい！ 誰かいたのか!?）」

もし、朝のパトロールのお巡りさんだったら、軽犯罪法か何かで、最寄りの交番でモニングコーヒーをいたただくハメになるだろう。

それは避けたいが……どうする？ そんなことを考えながら、潤一の視線は、その気配の方を向いていた。

……そこには、もっと気まずい状況が待っていた。

視線の元は、隣の電柱から、じっと見つめている子だった。ちん

まりとした体に、ジーパンと、白い綿のシャツ。取り立てて目立つ
服じゃない。どっかの男の子のようだ。

まずいな、前途ある少年に、悪い大人の、あんまり真似してはい
けない一面を見せてしまったか……と、そこまで考えて、潤一は気
がついた。

「（ちよつと待て。あの子の姿、男の子にしては変じゃないか？

あの顔立ち……腰から下のライン……手の小ささ……）」

潤一の体中から、ぞざざあつ！ と、音を立てて血の気が引いた。

「（女の子!）」

そう。ショートカットで男の子っぽく見えるだけで、あれは女の
子だった。

「（……どうするよ……男として、最低最悪のシーンを見られちま
ったよ……）」

しかし、生理現象とは残酷な物で、潤一のナニから出る排泄物は、
勢いを弱めなかった。

こういうときは、時間の流れが嫌に長く感じるなあ……。潤一は、
心で苦虫を噛みつぶしながら、噴水にならざるを得なかった。

が、しかし、潤一の視線の先その娘は、彼を笑うでもなく、い
ぶかしむわけでもなく……やけに目をキラキラさせて、潤一の姿を
見ていた。

やがて、ようやく出る物が止まった。満足げなナニを、そそくさとチャックの中に押し込める。

「（ええい、ここまで見られて、慌てて逃げるのも情けない！）」

潤一は、開き直った。

そして、『みつともねえトコ見せて、ごめんな！』と言う意味で、ちよつと会釈をした。すると、その娘は、キラキラした目でニコニコしながら、何度もうなずき、小走りに駆けていった。

「な……なんだったんだ……!?」

予想しなかったリアクションに、しばらく潤一は、その場にぼう然としていた。

そして、その次の週末。潤一は、日頃の激務にあの時のことなどほとんど忘れ、近所の商店街を歩いていた。

潤一は、これと言って予定のない休みは、一日をダラダラ過ごす事が多かった。

昼まで寝溜めをして、朝飯兼昼飯を喰い、後はコーヒーでも飲みながらぼーっとする。そして、夕闇迫る頃合いに、ぷらぷらと町中を散歩する……。一つの黄金パターンだ。その日も、そんな日だった。

た。

「ふん、ふふー……ん……」

覚え立てのはやり歌をあいまいな鼻歌にして、いつもの商店街をゆっくり歩く。あては特にない。あるとすれば、たまに喫茶店に入つて、手の込んだコーヒーを飲むぐらいのものでした。

「いい黄昏時だなあ……明日も晴れつかない……」

珍しいぐらゐに綺麗な夕焼け空に向かって、ぼそりとひとりごちた時だ。

「……？」

背後に、視線を感じた。通行人と、たまたま目が合う類のもではない。明らかに、潤一を凝視しているものだった。

はたと立ち止まり、後ろを振り向く。目を凝らして、視線の主を捜した。

「(あつ、いた……!)」

二十メートルほど後方、男の子らしい。いぶかしげな顔をして、潤一と、目が合った。……すると、その子は、遠目にハッキリ分かるぐらゐに満面の笑みをたたえて、潤一の方へ駆け寄ってきた。

「(何だ何だ!?)」

やがてその子は、彼の側までやってくる、息を弾ませながら、元気な大声で言った。

「先生！　ボクにぜひ、正しい立ちシヨンのやり方を教えてください！！」

正しく、潤一の中での時間が止まった。

完全なる硬直。

しばらく経つても、

「は………はい？」

その言葉を絞り出すのがやっとだった。だが、馬鹿丸出しの顔をしている潤一に対して、その子は、目をキラキラさせて、潤一を見つめている。

「へ………ちよつと待て。この目、どつかで見たことあるぞ………？」

「あっ！」

さっきのこの子と同じぐらいの声で、潤一は叫んでしまっていた。「（そうだ、先週の今日、俺がつい道端で立ちシヨンしてしまった時に、俺を見てた………女の子だ!!）」

見れば見るほど、確かにそうだった。ずいぶん体が小さくて、髪はショートカット。着ている服も男女兼用っぽいから、中学生ぐらいの男の子に見えても全く不思議はない。

だが、体の線とか、顔立ちとか、間近で見るとよく判る、化粧つ気は無いが、細かな肌のキメであるとかを見れば、明らかに女の子

である。

「あわわ……」

あの時の醜態が思い起こされ、潤一は、顔が赤くなっていくのが、自分でも判った。

『先生』？ それも、こともあるうに『立ちシヨンの仕方を教えてくれ』だって？ 女の子だろ？ 何なんだ一体……!? 潤一は完全に混乱していた。

図らずも見つめ合ってしまったっている潤一とその娘に、周囲からいぶかしむヒソヒソ声が聞こえ始めた。潤一的に、非常に恥ずかしい。

……こういう状況で、彼の中で、とるべき行動は、一つだった。

「あばよっ！」

素早くきびすを返し、潤一は逃げた。

「（こういう危ないのに関わると、ロクな事はないっ……!!）」

……という声にもかまわず、潤一は、ダッシュでその場を去った。

※

カラン……カラン……

そして潤一は、転がり込むように、なじみの喫茶店に入った。

「やあ、こんにちは。どうしたの？」

いつものヒゲのマスターが、慌てる潤一に少し驚きながら、にっこりと微笑みかける。

「ああ、いえね、その道ばたで、変な女の子に絡まれちゃって……」

潤一は、ふう、と、席に腰掛け、差し出されたお冷やを飲み干した。

「変？　どんな娘？」

きよとんとした顔で、マスターが返して来る。

「いやあ……とてもここじゃ言えないッスよ……公共の場ではとても……」

そうだ。特に、こういう飲食店などでは……

「立ちションって……」

「(そうそう。言えない。うん。……え?)」

「立ちションって、そんなに変ですか？　先生！」

「(……この……声……)」

潤一が、恐る恐る振り向いた。

そこには……

「ねえ先生！　立ちションって、そんなに変ですか？」

キラキラと目を輝かせた、あの娘が、いた。

なんでだ？ しかも、クリームソーダまで飲んでやがる！

「……ごめんマスター！ また今度!!」

潤一は、言いかけた注文をのみ込み、店を飛び出した。

「あつ！ 逃げなくてもいいじゃないですか、先生！」

「（いや、俺は逃げる。逃げさせてくれ!）」

潤一は走った。家へ帰ろう。いくらなんでも、俺の家までは分かるまい、と思いつながら。

「（……くそう……全力疾走なんて久しくしてないから、息が切れる……!）」

「ねえねえ……」

ちよつと待て。何か声が聞こえないか？ こんなに一生懸命走っているのに。

幻聴であることを願って、見やつた側には……

「立ちシヨンの仕方、ボクに教えてくださいよお」

あのキラキラした目がある。なんでだ？ 何でコイツは、息も乱さずに、楽々歩きたいについて来るんだ!? 潤一の混乱に拍車がかかる。

「いやだあああつ!!」

渾身の力で、潤一は加速をかけた！

「ねえ、先生！」

聞くもんか！ 潤一は、願わくばまけるように、思いっきり回り道をしながら走った。

「ねえ……」

「うおおおーっーっ」

「ね……」

「むがあああーっーっ!!」

……

「はあ……はあ……はあ……」

気がつくのと、彼女はいなくなっていた。

「（何とか諦めたようだな……）」

あたりは、とっぷりと日が暮れていた。潤一はようやく自宅へたどり着き、精根尽き果ててベッドに倒れ込んだ。そして、その日はそのまま眠ってしまった。

……案の定、週明けは酷い筋肉痛で、仕事にならなかったのは言うまでもない。

結局、その時の筋肉痛は、二日後ぐらいに引いた。潤一は、ああ、確実に体は衰えて行ってるんだな……と思うと同時に、あの妙な娘

の記憶も、鮮明に残ってしまっていた。そして、その次の週末……。

「うーん……」

昼下がり。一通りの身支度を終えて、潤一は考えていた。

「（またあの娘に出会おうんじや無かるうか？ 貴重な休みをメチャクチャにされるのは、もう嫌だ……）」

ふと、潤一は窓の外を見た。

「（ちくしょう、これでもかかってぐらい、気持ちよく晴れてやがる……）」

こんな日に家にこもってるのは、もったいない。非常に、もったいない。出かけたかった!! どうしよう……。しばらく考えて、潤一はひらめいた。

「そうだ！ 少し遠出をしよう！」

そう。あの娘に会ったのは、この近所だけだ。と言うことは、この近所の娘のほず。ならば、ああいう娘が一人で来そうもないところに行けばいい。

「そうと決まれば……よし！」

潤一は、電車とケーブルカーを乗り継いで行ける、近所の山へ出かけることにした。

近所なら一緒じゃないか？ と思う向きもあるだろう。だが、潤

一には、もう一つの狙いが合った。電車賃と、ケーブル運賃が高いのである。お子さまには、躊躇するに十分な金額だ。ここに社会人の強みが出る。

「そうと決まれば、行くか！」

そして、電車とケーブルカーに揺られることしばらく。潤一は、山の澄み切った空気の中にいた。

「んー……」

ケーブル駅の場所からして、既に見晴らしは絶景だった。行動時は変わらないから、すでに日は傾き、ここから見ると、街が、極薄い紫に染まって見える。そんな中、少しひんやりした空気が、日頃、ヤニにまみれた肺にしみわたる。

「（ああ、空気がうまいって、幸せだ……）」

そこから、適当に歩いてほどなく、喫茶店を見つけた。ログハウスの風の、ござっぱりした外見だ。

「……おっ……？」

ふと、鼻がコーヒーの良い香りを嗅いだ。喫茶店通いの長い潤一には分かった。ここは良い店だと。ためらわず、ドアを開ける。

「カラ……」

「いらっしやいませえー」

店内では、デニム地のエプロンの似合う、ロングヘアが可愛い

女の子が、カウンターの向こうで柔らかな笑みを向けてくれた。ラッキーだ。さらなる目の保養になる。あの娘みたいに中性的な子よ、こういう女の子らしい、カワイイ娘の方が良いよな、と、潤一は思った。

「(…：…：…：俺は、あの娘から逃れるために、ここまで来たんだろう？ 何でわざわざ思い出すんだよ…：…：?)」

自分自身に苦笑いしつつ、潤一は、適当な窓際の席につき、ごく普通にホットコーヒーを頼んだ。

…：…：やがて運ばれてきた物は、押さえ目の色遣いの花柄が渋いカップとソーサー。そしてそれにたたえられた琥珀色。かたわらに添えられたスプーンの上には、花柄をちよん、と食紅であしらった角砂糖が乗っている。

「(センスいいなあ…：…：彼女のアイデアかな?)」

これだけかわいけりゃ、多少コーヒーがますぐても許せるな…：…：と思いつつ、コーヒーを一口すすって、潤一は驚いた。

「(お、うまい!)」

雰囲気だけの問題ではない。本当にうまいのだ。

「(彼女、若いのにやるなあ…：…：。いつも行く店なんて、バイトの娘が淹れたら、確実にまずいのに…：…：)」

言葉にならない感動を味わいながら、ふと、テーブルに置かれた

メニューに目が留まった。野鳥の彫刻をあしらった、これまた可愛い写真立てに、メニューが入れてある。よく見ると、裏にゼンマイがついている。

「(ひよつとして、これ……)」

かり、かり、かり……とゼンマイを巻く。やがて奏でられた曲は、クラシックの名曲であった。オルゴールで聞くと、また違った風情があり、美しかった。

「はあ………」

幸せだ。つまらないことかも知れないが、夢のような幸せだ……と、潤一は思っていた。世俗の喧噪を離れ、黄昏を望む落ち着いた店に、カワイイ店員が淹れた、とびきりうまいコーヒー。それに、柔らかな音色を奏でるオルゴール。本当に夢のようだった。

「先生はよく、コーヒーを飲みますね。それがコツなんですか？」
「(……夢であつてくれ)」

「コーヒーには、利尿作用があるって言いますよね。じゃあやっぱり、これがいい立ちションをするポイントなんですわね！」

「(頼む！ 夢だと言ってくれ！ 係長！ 俺を起こしてくれ!!」
罰として、深夜残業でも何でもやるから!!)」

潤一は、顔を動かさず、視線だけを後ろにやった。

はたして、視線の先には、あの中性的な女の子がいて……なにか、

ノートを取っていた。

「……」

この間のように、逃げるのは簡単だ。だが、潤一はふと考えた。何も言わずに逃げてダメなら、いつそのこと、きっちり言い含められないかと。

それで諦めてもらえれば、お互い平穩に過ごせる。そうだ、思い切ってそうしよう！

潤一は、あの娘に向き直り、こっちへ来い、と手招きした。すると、目のキラキラを一層増幅させて、少女は潤一の向かいの席に飛んできた。

「なんですか？ 先生！」

座るやいなや、ずい、と身を乗り出して来る。なんだか、好物を目の前にした犬みたいだった。可愛いと言えれば可愛いがあしらい方を間違うと、噛みつかれる可能性も大……：そういう感じだ。そんなことを思いながら、潤一は言った。

「なあ、君……ちよつと聞いていいか？」

「はい！ 先生！」

期待に満ちた声。次のセリフが一気に言いつぶらくなる。

だが潤一は、無理矢理絞り出すように言った。

「……なんで俺につきまとうんだ？ 確かに、この間は、みっとも

ない所を見られたけど……何か欲しくてついてきてんのか？」
いきなり『もうついてくんない！』と言ったところで、逆効果かも知れない。潤一は、理由を聞きかかった。正直、弱みを握られるのはシヤクだった。申し開きができないから仕方がない。

「え……？」

突然、女の子の反応が変わった。笑顔が一瞬にして消え、しばしの間が流れる。

「何か欲しい物があったってつきまとってんなら、買ってやるから、もうやめてくれないか？」

潤一も嫌だったが、金でカタが着くなら、さっさとそうしたかった。言い切ってから、ふう、とため息が漏れた。

すると……。

「そんなのじゃ……ないです。そんなのじゃ……ない。そんなのじゃないの！」

カウンターの女の子が、何事かと目を丸くするほど、彼女は強く言った。潤一も、予想しなかった反応にびつくりする。

「あ……」

驚きが、声に出してしまった。

……彼女は、目にいっぱい涙を溜めて、それでもじつと、潤一を見ていた。

「（うつ……この顔、やっぱり女の子だ。本気で可愛いかも……つて、何考えてんだ、俺……!?）」

「ごっ……ごめんよ、そんなつもりじゃ……」

ありきたりすぎる台詞しか出てこないのが、悔しかった。慌てふためく潤一に構わず、彼女は言った。

「ボク、教えて欲しいの。立ちシヨンの仕方、あなたに、教えて欲しいの……」

思い詰めたような、すがるようにも見える、真っ直ぐな目……。

言ってる台詞は変だったが、本気であるのが察せられた。これを、『迫真の演技!』なんて言えば、バチが当たりそうな気がする。

「……」

「……」

そのまま、重苦しい沈黙が流れた。

「（……しようがねえ! 腹、くくるか!）」

開き直つて、潤一は言った。

「……わかったよ。教えてやるよ。そのかわり、一回だけだからな!」

「ホント!? やった、やったあっ!! 立ちシヨン! 立ちシヨーン!」

文字通り、体中で喜ぶ彼女。こっちも嬉しくなるような喜びよう

だが、あんまり大声で『立ちション、立ちション』と言うせいで、カウンターの女の子は、あからさまに不審がついていた。ジト目の視線が、体に痛かった。

「で、君の名前は？ 『先生』が『生徒』の名前も知らないのも、変だろ？」

結局、いたたまれなくなって店を出て、景色の良い展望台までやって来てから潤一は聞いた。

「ボク、ゆーき！」

涙にちよっと腫れた目……よほど嬉しかったんだろうか、喜びながら泣いていた……をこすり、彼女は答えた。

「ふうん……ゆーき、ね。俺は、潤一。友部潤一だ」

「よろしくお願いします、先生！」

「ところで、ゆーきの歳は？」

ぱつと見は、中学生かそらなんだが……実は高校生ぐらいなのかもな……と思っていたのだが、予想を超える展開になった。

「いくつに見える？」

ゆーきは、小首を傾げて、逆に聞いてくる。潤一は、思ったままを口にした。

「十三、四に見えるけど、ひょっとして、十六、七かなあ……」

て」

「じゃあボク、十六、七！」

すると、拍子抜けした答えが返ってきた。いくらなんでも、適当じゃないか？　と思う。

「おいおい、そりゃないだろ……」

「ボク、歳、忘れちゃったんだ！」

さらに聞こうとすると、そんな言葉で遮られてしまった。

「（なんだそりゃ？　……聞いてくれるなってことか？　ま、いいや）」

恐らく、これ以上年齢について聞いて聞いても、無駄だろう。そう直感で感じた潤一は、質問を変えた。

「じゃあ、ゆーき、『講義』の時間と場所は どうする？　任せるぜ」

「明日の夕暮れ、初めて先生に会った場所で！」

間髪入れずに答えが返ってきた。

初めての場所と言うと、友人の下宿と、駅までの道、その途中の所である。問題はない。

「わかった。じゃ、今日はもう帰るか？」

どこに住んでるのかは知らないが、ケーブル駅の下までぐらいなら送ってやるか……そう思っつて潤一は言ったのだが……

「うん！ 本当にありがとう！ 先生！ またね！！」
ゆーきは、ニコニコと微笑みながら手を振って、走り去ってしまった。

遠ざかる背中を見送ってから、眼下に広がる、濃紺の宝石箱になりつつある景色を見下ろす。

「ほんと、変な娘だな……」
それを見ながら潤一は、ぼそりとひとりごちた。

そして、次の日。そろそろ夕暮れという頃。自宅にて、潤一は困っていた。

『教えてやる』なんて見得を切ったが、正直、やり方なんて分からない。それはそうだ。立ちションに正しい形なんてあるわけないし、そもそも、女の子がやる必要なんて、ない。街中に転がってる、安っぽいエロ本のグラビアじゃあるまいに。

しかし、約束を破るわけにはいかない。潤一は、あの場所へと向うべく、家を出た。

空は、見事な朱色に染まっている。目的地へ急いでいるのは事実だが、早足で歩くのがもったいなくなるような、美しい空だった。大学時代の通学路と言うこともあって、通い慣れた道だが……な

んだかおかしいような気がした。

そう、不思議だ。人通りが全くない。車も、通らない。……確かに、取り立てて賑やかな場所ではないが、それにしたって、普段、それなりの人の気配はある。

「どうなってるんだ……？」

恐ろしさにも似た気持ちを抱きながら、潤一は、歩を進めた。

「先生……」

彼女は、そこにいた。

静まり返った夕暮れの中、一人、道に影を伸ばしている。

「お待ちせ」

いてくれたか。ひとまず、安堵の笑みで、潤一は答えた。

出会った目的は奇妙そのものだが、その風景は、ちよっとロマンチックでもあった。

「じゃあさっそく……」

そう言って潤一を見上げるゆゑの目は、夕日を反射してか、一番キラキラしていた。

「（ぐっ……）」

その瞳に見据えられると、恥ずかしくなるぐらいに、潤一の胸はドキドキした。

裏でこっそりと呼吸を整え、潤一は、ここへ来る前から考えてい

た質問を、ゆーき本人に直接尋ねた。

「んっ……ちよっと待った。その……どうやって教えたらいいか
な？ ゆーきは……あー………どういふ風な立ちシヨンをしたいん
だ？」

別に正しいも何も、いつも座ってしている事を、立ってやれば、
立派な『立ちシヨン』だ。この娘が思い描く『形』とは、何なんだ
ろう？ 素朴な質問だった。

「うん！ あのね、キレイな弧を描きたいの！ 先生の、凄くキレ
イだった！」

手で、その『キレイな弧』を描きながら、ゆーきはうっとりと言
った。

「うーん……」

潤一は考えた。頭の中に、高校の保健体育で習った、男性器と女
性器の断面図が浮かぶ。うん、そうだ。男と女では、尿道の長さが
違うんだ。長く外に出ている男と違って、女の子は短くて中にある
から、軌道調整………というか、その辺がやりにくい。

「（そーいえば、ガキの頃、『シヨンベンの飛ばしあい』なんて遊
び、やってたよな……）」

男連中は遠くまで飛ばせて喜んでたけど、女の子は、どうやって
もうまくいかなかったんだ。女の子達が、すごく悔しがってたのを、

潤一は覚えていた。今から考えると、あれって凄いい遊びだったよなあ……と思いつつ。

「先生、先生！ボクやってみるから、見て下さいよ!!」

考えている潤一に、ハキハキとしたゆーきの声が飛び込んできた。
「ええっ!? ……おいおい、人が来たら……」

慌てる潤一に、ゆーきは「だいじょぶ、だいじょぶ!」と言いな
がら、ジーパンとパンツを脱ぎ捨て、既に『構え』に入っていた。

「うわっ……」

その姿を見て、潤一はくらっ……ときた。

よりはっきり分かる、女の子特有の、下半身の線。容姿相応に、
翳りのない、だが、ぷっくりとした小さな丘。その中心に、すっ
……と通る線……。

潤一に、ロリコンの趣味はない。断言しよう。だが、その時潤一
は、ゆーきを可愛いと思った。そう、下半身に血の集まる『可愛
さ』を感じたのだ。また同時に潤一は、透き通る朱の中、白い半裸
をさらす彼女に、この世ならぬ美しさも感じていた。

「いきますよお……」

「明るい声でする。」

「あ……ああ……」

潤一は、なんだか頭に血が上ったように、気の抜けたような声を返してしまった。やがて……

「んっ……」

微かな声が出たかと思うと、

小さな割れ目からにじみだした泉は、地面に直接落ちることはなく、彼女の内もから両足を伝ってソックスと靴を濡らし、吸い込みきれない分が、足下に二つの染みを作った。

やがて、緩やかな風に乗って、ほんのり甘いようなオシッコの匂いが感じられた。

「ほらあ……こうなっちゃうんですよ……」

少し膨れて、潤一を見上げるゆゑき。

「……」

潤一は、めまいにも似た感覚を味わっていた。言い様のない感覚。ただ、心臓がバクバクと音を立てていた。熱い血が、グルグルと体を巡る。

「先生、どうしたらいいです……きゃっ！」

潤一は、彼女を背中から抱きしめていた。

……もう少し力を込めれば、どうにかかなりそうな体。だが、その体はとても柔らかく、二の腕辺りには、小さいが、一際柔らかい双

丘の感触。そしてそこからは、確かに『とく……とく……』という鼓動が伝わっている。潤一は、更なるめまいを感じながら、手を、細い腰に伸ばした。

「せ……先生？」

驚くゆゑに、潤一は優しく言った。

「分かったよ。ゆゑのココ、硬いんだ。自分で出口を閉じちゃつてるから、飛び散っちゃうんだ……」

「そこそと、まだオシッコに濡れている彼女の小さな丘を撫でながら、耳元に囁く。

「……潤一の頭は、痺れたように思考を止めていた。ただあるのは、この娘を『可愛い』と思う気持ちだけだった。

「あ……？」

撫でる指先に、少しずつ、力を込めていく。

片手から、両手へ。

撫でるように、から、押すように。そして、つまむように。

時に境目を指でなぞり、時に互いをすり合わせ……潤一は、その小さな丘を、ゆっくり揉みほぐしていった。

「せ……せんせ！ くっ……くすぐつたいですよお！」

本当にくすぐつたそうに、潤一の腕の中で、もがくゆゑ。

「まだだ……まだ、ほぐれてない……まだ……」

だが潤一は、その体をしっかりと抱きしめ、うわごとのように眩
きながら、完全に行為に没頭していた。

「んっ……？ ふっ……うっ……あ……ん……」

くにくに……くにつ……きゅっ……きゅっ……と、ゆーきの性器を
揉みほぐしていく潤一。やがて、ゆーきの反応が変わってきた。潤
一が力を入れるのに併せるかのように、くすぐったさと甘さの混じ
った声を上げ、腰がびくり……びくり……と震えていた。その仕草
一つとつても、可愛かった。

「あっ……！ んんっ……！ はあっ……はっ……！」

くにくにくに……と、なおもゆーきの性器をほぐす潤一。ゆ
ーきの声の甘さは濃度を増し、丘も、随分充血してきたようだった。
指先の感覚が、かなり柔らかくなってきていた。同時に、おしっこ
とは違う、湿っぽい熱さが感じられるようになってきた。

「あっ……せ……せんせ……ボク……あっ……へん……へんだよお
……はあっ……はあふっ……うんっ……！」

ゆーきは荒い息をつきながら、両腕を潤一の腰に絡めてきた。ど
うやら、足に力が入らないようだ。

「ひゃっ!?」

潤一は、右手の人差し指を、開きかけているスリットの中に、つ
ぷりと潜らせた。ぬるりとした温かさが、指に心地良い。そのまま、

問題の『出口』を探り当て、ゆつくりとさする。

「あああんっ！」

ガクガクとゆーきのヒザが震える。だが潤一は手を緩めず、親指で、丘に埋もれかかっている小さな芽を探った。

「きやあーっ!？」

触れたとたんは一際かん高い声上がる。『出口』と一緒にくるくと優しくさすり続けると、境目の中をまさぐる指が、水っぽい音をたて始めた。

「せんせええ……ボク……また……出る……出ちやうよお……」

そこに、震える声が聞こえた。

「よし……俺が出口を広げてるから、出してみな……。きつと、うまく行くから……」

四本の指で、きつめに丘を分ける。もし、下から見上げれば、『出口』がよく見えるぐらいのはずだ。そして……ぷにり、と、『出口』をもう一度、しつとりと濡れてしまった人差し指でさする。すると……

「あんっ！　で……でる……よお……ふあ……あ……あああーっ!!」

ぷしゃああっ……！　と、ゆーきの性器から、おしっこがほとぼしる。ちよつと緩い、それでも、見事な弧。確かに、描いた。夕焼

けの光を乱反射して、銀色に輝く弧。ゆっくり、だが強くほとばしり、道に飛沫を立てていった。

「あつ、あああつ、ふわ……あはあつ……！」

「やったね」

潤一は、無意識に、ゆーきを強く抱きしめていた。肩越しに顔を覗いた彼女は……

「はあつ……はあつ……やった……ついに……やったよ……」

泣きながら、ぼう然と呟いていた。

そして、次の瞬間だった。

「うっ……うわっ!!」

ゆーきの体が突然、光輝きだした。そして……潤一の手をすり抜け、ふわりと、宙に浮いた。

「ゆ……ゆーき!!」

光輝く彼女は、潤一が見上げるほどの所に浮き、ゆっくりと言った。

「……本当にありがとう。ボク、とっても嬉しいよ。これでボクの役目は終わった……」

「や……役目？」

「そう。……あなたは憶えがないかな？ 子供の頃、遊びの一つと

して、みんなと一緒に『オシッコの飛ばしあい』をしたのを。男の子はキレイな弧を描いて遠くに飛ばせたけど、女の子にはうまくできなかった。『どうして自分にはできないんだろう？ どうして自分には、男の子と同じ物がついてないんだろう？ 悔しいなあ：』ボクはね、そんな女の子達の、とつても小さな昔の想いが、たくさんたくさん集まってできたの。男の子みたいに、キレイな立ちションがしたいなあ：：それが、ボクの願い。みんなの想いを空に返すことが、ボクの役目だったんだ。あなたのおかげで、想いが叶った。役目を果たせた。本当に、ありがとう：：。さよなら：：。』
そして最後ににっこり微笑んで、ゆーきは、霧のように空へ溶けていった。

「：：：：：：：：：」
潤一は、ただぼう然と、ゆーきが消えた空を、日が暮れるまで見上げていた。

※

「うー：：：：：：：：：」
それからしばらく経った、ある日の早朝。潤一は、再び友人の下宿で徹夜飲みを敢行し、いつもの帰り道を、ふわふわと歩いていった。

今日も見事な朝焼けだった。

「……そう言えば、あの娘と会ったのは、こんな朝だったよなあ……」

同じ道、同じような朝焼けに、潤一は、ゆーきの事を思わずにはいられなかった。やがて、最後に『講義』をした場所に来た。自然と、足が止まる。

「………」

空を見上げる。突き抜ける、朝の薄紫が、美しい。

ふう、と、空に向かって小さく息を吐く。彼女の顔を思い出すと、なぜだか胸が締め付けられ、鼻の奥にツン……と酸っぱい感覚がわき上がる。

『講義』の時の『可愛さ』もそうだったが、あの真っ直ぐできれいな目、本当に純粋な笑顔。そう滅多に見られるもんじやない。

ずっと見ていたくなるような笑顔。

胸が熱くなる笑顔。

なぜだか優しい気持ちになれる笑顔。

一人占めしたくなるような笑顔。

でも、それを見ることは、もう、ない……。

「ちよつと……寂しい……かもな……」

見上げる朝焼けがにじむ。涙だった。

「ははっ……何言ってんだ、俺……」

涙を袖口で拭い、照れ隠しに空へ向かって少し微笑んでから、潤いが、再び歩き出そうとした時だ。

「せーんせっ！」

聞き覚えのある声でした。

背中に感じる、この視線……。

「あぁっ！」

まさか、と思って振り向いた後ろには、果たして、ゆーきがいた。あの時と同じ、キラキラした目で微笑んでいる。

「どっ……どうして……？ 成仏したんじゃないのかよ？」

厳密に言えば違うのだが、その時は気づかなかった。

「へへえ……」

口をぱくぱくさせる潤一に、ゆーきが言った。

「あのね、想いが叶って、空に帰るときにね、わかんないことが増えたのに気づいたんだ！」

「わかんないこと……？」

「うん！ 女の子達みんなの気持ちじゃなくて、ボク自身を知りたいこと！ だからボク、神様に頼んで、ちゃんとした人間にしても

らったんだ!!」

寛大な神様もいたもんだ……。しかし、分からないことって何だ

ろう……？ 潤一が首を傾げていると、ゆーきが、ちよいちよいと手をこまねいた。耳を貸せ、と言うことのようにだ。心なしか、顔が赤い。潤一は、首を傾げたまま、耳を寄せた。ぼそぼそと、ゆーきが言う。

「あの時先生、ボクの体を後ろから抱いてくれたでしょ？ ……その時、ボクの腰のあたりに、なんだか固い感触がしたんだ。先生の体の一部みたいだったけど、あれ、何なのかなあ………つて………」
再び、潤一は石になった。

「（………こいつ、知ってて言っていないか………？）」

「………」
「………」

耳まで真っ赤にしたゆーきと、困ったふりをして微笑む潤一。しばらく、見つめ合う。

やがて、ゆーきがモゾモゾと言った。

「それで………そのう………次の講義場所の希望なんですけどお………ボク、住むところが………わあっ！」

潤一はその言葉を遮り、ゆーきの両肩をばんっ！ と叩いて言った。

「分かった!! ……これから、これからずっと、俺の家で補習だ!!
いいなっ!!」

●第二章 『分からないこと、教えてください！』

——そして潤一は、ゆーきを連れて家に戻った。

予想外の同居人発生イベントだったが、幸い、潤一の自宅は2D
Kで、一人増えてもなんとかなるのが救いだった。

とりあえず、自分の部屋にゆーきを通し、彼女と向い合って正座
する。

「さて…：ゆーき君？」

「なあに？ 先生！」

おほん、と咳払いをして聞く潤一に、ゆーきは、またも期待感に
目を輝かせて答える。

ああ、あの笑顔だ…：と、またしても少し嬉しくなりながら、潤
一は『本題』を切り出した。

「さっき言った、『ボクの中で分からないこと』って…：お前、知
ってて言っただけか？」

「あ、ばれちゃった？ てへ…：」

「おいしい！」

若干ジト目気味に聞いてみたが、あっさり肯定され、潤一は驚く
と同時に、盛大に脱力した。

「てへへ、じゃねえだろ！ こいつつ！」

「お、怒らないでよう……！」

「って、お前、そもそもが思念の集合体だったよな？　なんでそんな知識があるんだ？」

「それはね、神様が気を利かせてくれたから！」

「気を利かせた……って……？」

「うん。知識は、だいたい十七歳の女の子が知ってる水準のものを、最初から与えてもらってね……」

「なんとまあ……」

「こういうのを、『粹なはからい』と言っていいものか？　少し頭を抱えたくなる潤一だった。確かに、最近の十七歳なら、性行為についてひと通り知っていてもおかしくはない。

「後、『いきなり空から降ってきた娘』なんて、お役所に言えるわけないですから、戸籍も作ってもらったんだ！」

「そこまで!？」

「それから、先生との出会いも、立ちション抜きにして、適当に作ってもらったんだよ！」

「するって……？」

「うん！　ボクは孤児院に入っていて、そこへ、先生が熱心にボランティアで来てくれてて、そこで出会った、ということになってる

の！」

「ま、まあ、それっぽくはあるわな……」

「至れり尽くせりな神様もいたもんだ。感心するやら、呆れるやら、どっちの反応をすればいいのやら？ いずれにせよ、潤一には、溜息をつく他なかった。」

「あ、そうだ」

「……まだ何かあるのかよ？」

「神様が、天界から、先生のことを調べたんだよ。あれこれ」

「あれこれ……」

「それで、『食生活が偏っているのが気になる』って言うててね……」

「神様は、管理栄養士かよっ!？」

「確かに、潤一の食生活は偏っていた。朝は大体、ジャムトースト一枚に、インスタントコーヒー。時間と気分之余裕があれば、そこに目玉焼きと、キャベツの千切りが加わる。昼は職場近くのコンビニで弁当を買い、夜もコンビニで済ませることが多い。ある種典型的な、男やもめの一人暮らしの有様だった。」

「先生、ダメだよ？ コンビニ弁当ばかりじゃ……」

「う、うるさいっ！ で、ゆーきに何が出来るってんだ？」

「うん！ 家事全般のスキルを与えてもらったんだ！ これからは

毎日、ボクが先生の食事を作ってあげられるよ！ 掃除と洗濯も！

「な、なにいつ!?」

嬉しそうに言うゆーきに、さすがの潤一も驚いた。女の子の手料理が食える。これは、財政的にも、健康的にも、喜ぶべきポイントだろう。

実のところ、潤一も、一人暮らしを始めた頃は、自炊をしていた。しかし、保存しようと思っただけ量を作っても、結局一人で食ってしまったので、コストパフォーマンスとしては、それほど良くなかったのだ。なので、手軽なコンビニ弁当に走った……という経緯があった。

実際、神様に心配されるよりも先に、潤一自身が気づいていた。こんな偏った食生活じゃダメだと。また自炊に戻ろうかと思っていた矢先だっただけに、ゆーきの申し出は、潤一には、願ったり叶ったりであった。

「それは確かに、助かるなあ……」

「お弁当も作れるから、三食はバツチリだよ！」

「いや、ありがとう。マジ助かる……」

一個人の食生活まで心配してくれるとは、神様って意外に身近なのか……と思う潤一であった。

「他に何か、知りたいことはある？」

「うーん：：あ、そうだ！ ゆーき、さつき、戸籍とか作ってもらった、って言ってたよな？」

「うん！」

「対外的な苗字とかも、もらったのか？」

「うん、もらったよ！ ボクの対外的な苗字は、『神原』で、名前の漢字は、『有紀』！」

それからゆーきは、「神様の原っぱに、有る無しの有、紀元前の紀ね？」と解説してくれた。

「『かんばらゆうき』ね。分かった」

潤一は少し安堵していた。これから、同居生活を続けて行けば、早晚、会社の人間にバレる。そうなった時、どう紹介と説明をするかが心配だったが、これで問題はないだろう。

「アリーブイは完璧ってわけだな」

「そうなるね♪」

「ふむ：：：」

若干脱線はしたものの、さしあたって、疑問点は全て潰せた。後は、話を最初に戻すだけだ。

「まあ、諸々含めて分かった。ちよつと話がそれたが：：：」
「だね。ちよつとのつもりが、大分打線しちゃった」

「元に戻すぞ。ということとは、ゆーきは、全部理解した上で、『分らないことを教えてくれ』って言ったんだな？」

「……うん」

確認を取る潤一に、ゆーきは、ぼうつ……と照れた。その照れ顔が、潤一の嗜虐心を、いたく刺激したのだが、当のゆーきに、気づいた素振りはない。

「（うおおっ……!!）」

残っていた空腹感も、もはや感じない。

今、潤一を支配しているのは、猛り狂う獣欲だった。

最近、忙しくてオナニーさえしていないなかったところだ。

そこへ、『抱いてくれ』という意思表示をした女の子がいる。

「（燃えるっ……!!）これは燃えるっ……!!）」

ただし、勢いに任せて凌辱の限りを尽くせるか？ と聞かれれば、答えはノーである。潤一自身、そこまで子供ではないつもりだ。

「なあ、ゆーき」

「へ、はえ？ なあに？」

「平たく言えば……その、なんだ。『抱いてくれ』って言ってるんだよな？」

「そそそ、そうなる、かな……」

慌て気味のゆーき。潤一は、自分自身のガス抜きも含めて、「ふ

うーっ……」とため息をついた。ややもすれば、ゆーきを傷つけかねない獣欲に、理性の鎖をかけていく。

「『今から抱くぞ』って言われて、ゆーき、心の準備は大丈夫か？」

「はへっ!? だだだ、大丈夫だじょ!」

「噛むなよ。大丈夫でないなら、少し時間を置くか？」

「そそそ、そうだね……。できれば、夜まで待つてくれりえば……」

「……分かった。んじゃ、夜にな」

噛み噛みなゆーきに、潤一は、また少し安堵していた。

初体験を前にして、緊張しない女の子はいない。

もしゆーきが、『今からでも大丈夫だよ!』と元氣よく答えたなら、彼はゆーきに対して、幻滅していたかもしれない。

「(普通の女の子、だよな……)」

ふうっ、と、おとなしめのため息をつく。潤一は、あれだけ猛り狂っていた獣欲を、完全に押さえ込むことに成功していた。

「そっか。じゃあ、悪いけど、今から寝させてもらっていいか？」

獣欲を抑えこむと、忘れていた眠気が襲ってくる。同時に、自分が、徹夜飲みの帰りであり、体中が酒臭く、タバコ臭いことも思い出す。

「うん、分かったよ！　先生、お腹すいてない？」

「ああ、減ってる」

「じゃあ、先生が寝てる間に、ボクがブランチを作るよ！　起きたらすぐに食べられる感じで！」

「頼めるか？　有難い。あ、でも待てよ……」

「あれ？　どうかした？」

「いや、食材がな。料理するってほどあったかな？　と違ってな……」

今はまだ早朝。スーパ―は開店前だ。近くのコンビニでも食材は調達できるが、コストパフォーマンスが悪いのは目に見えている。どうするか……と考える必要はなかった。

「先生、冷蔵庫はどこ？」

「ああ、こっちだ」

正座から立ち上がり、ゆーきを案内する潤一。一人用の冷蔵庫を、二人で開けて覗きこむ。

「ふむ……ふむふむ……」

入っているのは、六枚切りのパン四枚と、ハムが二枚、密封バッグに入ったキャベツの千切り、その他は、卵が三個。後は、一人暮らしにおいて万能調味料であるところの、めんつゆと、ケチャップとマヨネーズ。はつきり言つて、ガラガラであつた。

「包丁とまな板はここ。調味料のたぐいは、ガス台の上な。あと、油はガス台の下の棚だ」

「大丈夫だよ、先生！ これでも、バッチリ美味しいものが作れるから！」

えっへん、と、胸を張るゆーき。根拠が無いわけではないらしい。「そうか？ じゃあ、頼むな。俺、これからシャワー浴びて、多分昼ごろまで寝ると思うから」

「うん！ ぐうぐう寝ちゃって！」

「あ、そうだ。ゆーき、ちよつと来い」

「え？ なに？」

小首を傾げるゆーきを、潤一は、空き部屋へと案内した。

「こっちの部屋、今日からゆーきの部屋だ。今は物置になってるが、俺が起きたら、一緒に片付けよう。後、必要なもの……さしあたって、衣料品だな。その辺も買い出しに行こう」

「わあ……ありがとう、先生！」

自分の部屋が与えられて、目をキラキラさせるゆーき。潤一はなぜか、いいことをしたような気分になっていた。

「他に、今のうちに聞いておきたいことはあるか？」

「ううん、ないよ！」

ぶんぶん、と、ゆーきは元気よくかぶりを振る。否定をするのに

元氣よく……ってのも、ちょっと面白いよな、と思いつつ、潤一は「そっか」と頷いた。

「それじゃ、俺、シャワー浴びるな」

「はい、ごゆっくり！」

そうして、潤一は風呂場へ向かい、汚れきった身体をシャワーで小綺麗にし、出てすぐにゆったりとしたパジャマに着替え、布団に潜り込んだ。そして程なく爆睡モードに入り、宣言通り、昼近くまで眠りこけた。

※

「ん、うー……ん……」

やがて、どれぐらい眠りこけただろう。夢も見ない眠りを堪能し、潤一は、意識が覚醒していくのを感じていた。

「（ん……いい匂いがある……）」

寝ぼけ眼にも、それははっきりと『いい匂い』だった。何かが焼けた音と、コンソメの匂いがある。潤一が、むくり、と身体を起こすと、キッチンの方から声がした。

「あっ、先生！ 起きた？ じゃあ、後三分待ってね！」

「んあ……分かった……」

さしあたり、目覚めの一服として、タバコに火を点ける。すうつ
：と大きく吸い込み、深く吐き出す。この一服で大体五分使うか
ら、三分の二ほど吸えば三分のはずだ。

潤一は、ぼんやりとタバコの先端を眺めつつ、ゆーきが、あの食
材で何を作ったのか？ を、うつすらと考えていた。

「できたよおー！ 今、そっちに持って行くからねー！」

「ん、分かった」
タバコを吸うと同時に、意識がかなりはっきりしてきた。と同時
に、ぐう、と分かりやすい音を立てて、腹が鳴る。

「はい、どうぞ！」

「お、おおう……！」
出てきたものを見て、潤一は、感嘆の声を上げていた。

メニューは、スクランブルエッグとハムのホットサンド。そして、
キャベツのサラダ、後は、コンソメスープだった。

ホットサンドは、パンを今まさに焼いたんだろう。香ばしい匂い
がした。

キャベツには、いつもかける出来合いのドレッシングではなく、
酢の匂いからして、お手製のドレッシングがかかっているんだろう。
潤一の「最近、酸っぱいものって食ってないよなあ」という欲求と
合致する。

そしてスープである。潤一自身、半分忘れかけていたことだが、調味料の中には、そういえば顆粒のコンソメがあった。それを湯に溶かしただけだろうが、長らくコンビニで買うインスタント味噌汁以外飲んでいなかった潤一には、『洋風の汁物』というだけで、十分に魅力的だった。

「冷めないうちに、どうぞ！」

「おう、頂くぜ！」

早速、ホットサンドにかぶりつく。

「うむっ……！」
思わず唸る。スクランブルエッグの味付けは、絶妙な加減の塩コショウ。そして、それをマヨネーズで和えてあった。卵の旨味と、濃厚なマヨネーズのハーモニーが憎い。また、それを挟むトーストも、焼きたてでこんがりとしていて、サクサクの他ごたえがまた憎かった。

「もぐもぐ……美味いっ！ 美味いよ、ゆーき！」

「あはっ、よかったあ……！」

続けて、野菜に手を伸ばす。予想通り、ドレッシングは、塩コショウと油と酢を混ぜた、お手製のものだった。手軽にできる分、このドレッシングは配合比率が肝だ。そして、その比率たるや、潤一が食った瞬間、『黄金比!』と思うほど絶妙だった。酸っぱすぎず、

油っこすぎず、塩コショウも、良い感じに効いている。

「(サラダって、こんなに美味かったんだ……!)」

目から鱗が落ちる感じのする、潤一だった。

「もぐっ、もぐもぐ、んぐっ……」

「えへ……」

勢いよく平らげていく潤一を見て、ゆーきが、嬉しそうに微笑む。おそらく、その笑顔を見れば、潤一が食べ物喉に詰まらせることは間違いないと思われた。

「ふはあ……! ごっそさんっ! 美味かった!」

「はい、お粗末さまでしたー!」

やがて、潤一は、きっちり全てを平らげた。今の彼を満たしているのは、幸せな満腹感だけであった。まともに食っていない状態で、女の子の手料理を腹いっぱい食う。これがどれほど幸せであるかは、想像に難くない。

「それじゃ、食器下げていい?」

「おう、下げちゃってくれ。食器洗ってる間に、俺、着替えとくな。ゆーきの準備は……いらないな」

「あはは、そうだね。なにせボク、着の身着のままだから……」
困り笑いを浮かべるゆーき。買い出しに出たら、もうちよっとい

い服を買ってやろう。潤一は、こつそり心に決めた。

「よしっ……！」

そして、潤一の身支度が終わった。と言つても、パジャマを脱いで、外出用のシャツとズボン、それに春用のジャケットを羽織つただけだ。

「おい、ゆーき。終わったか？」

「うん、終わったよ、先生！」

「よし、んじや行くか」

「オツケー！」

元氣よく返事を返すゆーき。彼女がこちらへ来る手……ぷにぷにすべすべと、きめ細やかで、間違ひなく『女の子』を感じさせる……を引いて、潤一は、自宅を出た。

「わっ!!」

「ん？ どうかしたか？」

「ひゃ、うあつ、先生、手……」

「嫌か？」

「そそそ、そんなことはないよっ！ 嬉しい、よ……！」

「なら問題ないな？ さ、行こうか」

「ん、うん……！」

ぽうつと赤くなっているゆーき。潤一は、彼女を『微笑ましい

な』と思いつつ、商店街へ出かけることにした。

※

そして、近くの商店街。大型のスーパーがあるので、ほとんどのものは、そこで手に入る。

休みの午後とあって、人出はかなりのもので、うっかりしているとはぐれてしまいそうだった。

「スーパーまでの道順、覚えておいてくれよ？」

「うん、大丈夫だよ！」

「とりあえず、衣料品コーナーへ行くか。夕食の買い出しは、その後でいいだろ？」

「そうだね。下着類は、ボク、明日の着替えもないから……」

「だよな。んじゃ、行こう」

「うん！」

引き続き、ゆーきの手を引き、潤一は、衣料品コーナーへ向かった。

「ええっと、女物のショーツは……こつちか」

「うわ、たくさんあるなあ……」

「ショーツ三枚で千円だとき。五〜六枚あれば、いいんじゃないか？」

「んつと、そうだね。じゃあ、きりがいいから、六枚買っちゃおつと」

「ブラも買うか？」

「んー…：ブラジャーは、スポーツ用のしか合わないかな〜って、ボクのサイズだと…：」

自分の胸を見て、ちよつと困るゆーき。確かに、彼女のバストカ
ップは、いわゆる『つるぺた』ではないものの、明らかに貧乳だ。

「うう、やっぱり、合うサイズがないよう…：」

しょんぼりと言うゆーきに、潤一は、「これからの成長に賭け
ろ」と言いたくなつたが、すんでのところで飲み込んだ。

「んじゃ、ショーツだけだな？ 時間はあるから、焦って選ばなく
てもいいからな？」

「ありがとう！ えーつと…：」

早速、ショーツの物色を始めるゆーき。それはいいのだが、潤一
は、妙な居心地の悪さを感じていた。

「（…：ま、当たり前前か…：）」

いくら異性同伴とは言え、いい年の男が、下着売り場にいるので
ある。周囲の視線が痛いのは、ある意味当たり前前だった。

「（気にしたら負け、気にしたら負け……）」

そう心の中で呟きつつ、潤一は耐えた。一分一秒がとても長く感じたが、耐えた。

「先生！ 決まったよ！」

「ん、分かった」

早々にゆーきの物色が終わり、潤一は、決断の早い彼女に、救われた気がしていた。会計を済ませ、下着売り場から撤収する。

「先に、服屋に行こう。とりあえず、着替えだけは何とかしないと、何をするにも困るだろうし」

「先生にお任せ！」

ゆーきの返事を聞いて、潤一は、ひとまずスーパーを出て、少し歩いたところにある服屋へ向かった。

——というわけで、服屋。個人経営ではなく、大手のチェーン店である。

「もしかして、スカートとか欲しかったか？ だったら、別の店に行くが……」

「ううん、ジーパンで大丈夫！ スカートは、ちょっとボクには似合わない気がするし……」

んー、と空を仰いで思案しつつ、ゆーきが言う。潤一は、ちよっ

と安心していた。スカートが似合わない、と言ったゆーきと、ほぼ同意見だったからだ。やっぱり、この彼女には、中性的な服がいい。少なくとも今は。

「ジーパンは何本買う？　今はいてるのと合わせて、三本ぐらいか？」

「そうだね。それぐらいでいいと思うよ」

「自分のウエストサイズは、把握してるか？」

「うん、大丈夫！」

「んじゃ、適当に試着して、買っちゃってくれ。後、トレーナーとか、上着類も、好きなだけ買っていいぞ」

「うんっ！　了解っ！」

そう言うと、ゆーきは、レディースのシーパンコーナーへ行き、物色を始めた。

「これと、これとお……」

そして、四、五本のジーンズを持って、試着室へ入っていく。

「あ、先生。ボクの荷物持ってもらえる？」

「ん、分かった」

潤一が、ゆーきから、先ほど買ったショーツの袋を受け取る。ゆーきは、「ありがとう」と言って、試着室のカーテンを閉めた。

そして、待つこと数分。しゃっ！と、試着室のカーテンが開いた。

「決まった！」

「思ったより早いな……」

もつと延々掛かると思っていたので、こうもサクサク進むと、ちよつと肩透かしを食らった感じになる潤一だった。

「後は、裾上げだけか？」

「そうだね。店員さんと呼んじゃおう。すみませーんっ！」

「ただ今参ります」

パタパタと、女性店員が早足でこちらに来る。ゆーきは、裾上げを頼みたい旨を告げ、店員に、上げた裾部分へまち針を刺してもらっていた。

「よし、ジーパンが終わったら、後はシャツとか、トレーナーとか、ジャケツトだな。こっちだ」

「ね、ねえ、先生？」

「ん？ どうした？」

「さつきから色々買ってるけど、大丈夫？ お金……」

「ゆーきは心配すんな。大丈夫だ。これでも、社会人だからな」

不安げなゆーきに、潤一は、どんと胸を叩いて言った。それを見て、ゆーきも、「ならいつか」と答えた。

「とは言っても、無尽じゃないからな。頭の隅に置いてくれ」
「それは分かかってるってば！ えつと、じゃあ……上着類だね」

「こつちだ」
「あ、うん」

潤一に手を引かれ、ゆーきは、上着コーナーへと移った。

「うわ、たくさんある……」

山と並んだ上着類に、ゆーきが驚く。しかし、その顔は嬉しそうなのを、潤一は見逃さなかった。なので、ちよつと財布の紐を緩めた。

「好きなだけ買っているぞ」

「ほんどっ!?」

「うおわっ!?」

思い切り反応するゆーきに、潤一も驚く。

「あ、ああ。いいぞ」

これで、トレーナーを十枚、とか言われたら、ちよつと困る。まあ、いざと言う時にはクレジットカードを持っているので、そっちで決済すればいいのだが……と、潤一は思った。

「えーつと、えーつと……♪」

いかにも嬉しそうに、ゆーきがそれぞれを見比べつつ、トレーナーとTシャツ、ジャケットをかごに入れていく。

「(わ、割と買うなあ……。ひい、ふう、み……。)」

瞬く間に埋まっていくかごを見ながら、潤一は、ちよつとハラハラしつつ、服に着いている値札を見て、頭の中で暗算していった。

「(ほっ、何とかカードは使わずに済みそうだな……。)」

安堵に胸をなでおろしつつ、潤一は、ゆーきの欲しい物が全部揃うのを待った。

「これでいい！」

「よし、分かった！」

やがて、満杯になったかごを持って、ゆーきが言う。

「んじゃ、まずは会計だな」

「だね」

レジに並び、会計を済ませる潤一。正直、かなりの出費ではあるが、ゆーきのため、と思えば、どうと云うことない。まったく、不思議であった。その足で、裾上の受付に、二本のジーパンを預ける。

「出来上がりは、三十分後になります。よろしいですか？」

「うん、大丈夫！」

「ありがとうございます。では、控えをお渡ししますので、出来上がりの時間にこちらを持ってお越し下さい」

丁寧な店員から受付の控えを渡されるゆーき。大事そうに畳んでポケットに入れ、潤一に言う。

「ねえ、先生？ 待ってる間の三十分に、スーパーで夕食の買い出し、済ませちゃわない？」

「そうだな。そうしよう」

時間を有効に使うには、ゆーきの提案はベストだった。反対する理由もない。潤一は、「行くか」と言つて、二人揃つてスーパーへと戻つた。

——そして、スーパー。この店は、一階と二階が食料品売場になつており、三階が、先ほどショーツを買つた、衣料品と日用雑貨のフロアになっている。

「先生、今晚は、何が食べたい？ 和洋中、なんでも出来るよ？」

「頼もしいな。うーん、和食で……煮物系が食べたいかも、だな。」

「炒め煮っぽいやつというか」

「ふむふむ。炒め煮、ね。『これが食べたいっ！』つていう食材はある？」

「そうだなあ……あ、豆腐！ 豆腐が食いたい！」

「なるほどお。豆腐を使った炒め煮……というと、炒り豆腐なんか、どうかかな？」

「お、いいねえ！」

潤一は歓喜した。炒り豆腐なんて、実家でさえ滅多に食つたこと

がない。それが食える。ゆーきの料理の腕については、さっきのブランチで立証済みだ。楽しみにならないわけがない。

「じゃあ、炒り豆腐で確定だね♪ あ、必要な食材って、どっちの階で買えるの？」

「野菜とか豆腐とか肉類は、全部二階で揃うよ。一階は、パンとか牛乳とか、出来合いの惣菜をメインに置いてるから」

「なるほど、なるほど。だったら、早速買っちゃおう！」

かくして、メニューが決まり、二人は揃って必要な食材をかごに入れていった。その様子は、端から見れば、しっかり者の妹と、ちよつとダメな兄の像を、周りに与えていった。

「ん、ちょうどジーンパンが上がってる時間だな。行くか」

「うんっ！」
時計を見ると、ジーンパンの仕上がり時刻を五分ほど過ぎている。食材の買い出しは終わっているの、後は、受け取ったら帰るだけである。

「ありがとうございますましたー」

再び、服屋。裾上げ作業が出来上がったジーンパンを二本、店員から受け取って、二人は店を出ることにした。

「なあ、ゆーき。他に買い忘れはないか？」

「んーつと、そうだねえ……。服の収納ボックスが欲しいけど、後でもいいや」

「そっか。んじゃ、そっちは……。スーパーの三階にあったかな？
無けりゃ、ネット通販で買うか」

「うん、了解。それじゃ、帰ろつか、先生？」

「だな」
並んで、家路に着く二人。潤一的には、手を繋ぎたかつたのだが、荷物で両手が塞がっており、それは無理だった。まあ、触れる機会はこれからたくさんあるだろう。一回ぐらいは我慢しよう……。と思うことにした。

「――というわけで、一杯の荷物を抱えて、二人は帰宅した。時間は、まだ午後三時ぐらいだった。

「とりあえず、食材を冷蔵庫に入れるのが先だな」

「だね。ぱぱつとやっっちゃおう」

「頼む。洋服類は、袋ごと、ゆーきの部屋に置いとくからな？」

「あ、ありがと。そうだ、晩御飯の下準備をしておくよ！ 干ししいたけを水で戻しておこう」

「そのへんは任せる」

どさり、と、ゆーきの部屋へ荷物を置く。改めて見渡すと、その部屋は物置になっていてただけでなく、かなり埃っぽかった。こりや、徹底的に掃除機かけないとダメだな……と思う潤一だった。

「先生、終わったよ！」

「ん、分かった。じゃあ、掃除と片づけにかかるぞ」

「うんっ！」

そして二人は、部屋の掃除にかかった。とは言え、六畳間の中央に積まれているダンボールを、一部は潤一の部屋に、残りは押入れに収納、あるいは壁際に寄せて、後は掃除機をかけるだけだったのだ、まともにやれば、三十分とかならないはずであった。

「寝具一式は、来客用のが押入れにあるから、それを使えばいいな？」

「ありがとう！」

……ところが、簡単なはずの片付けに、二人は多大な時間を要してしまった。

なぜか？ 理由は単純である。『ダンボールの中身を改めてしまった』からだ。

「この箱、何が入ってたっけなあ……うげ、不要マンガばかりだ……」

「そういうのは、古本屋さんに売っちゃえば？」

「それもそうなんだが……いざ売り払うとなると、中身がどうだったか気になる……」

「こんな風に、潤一自身忘れていた存在のマンガに気を取られたり……」

「こっちの箱は何かな？ きやつ、エツチな本だあ……！」

「あわわ、み、見るなっ……！」

「きゃーきゃーきゃーっ！ 先生のエッチい……！ でも……」

「な、なにをじっくり見てますか、ゆーき君!」

「あるいはこんな風に、潤一がひとまとめにしていたエロ本を、ゆーきが熟読していたりして……」

「うーむ……」

「きゃあー、きゃああー、すご……うわー……」

本を読んでいると、時間が経つのは早い。二人とも没頭していたので、時間の経つスピードは、加速をつけたかのようにだった。

※

「うん？ なんか外が薄暗く……って、もう六時かよ!」

「うわあっ！ 大変だあっ！ 急いで晩御飯の支度しなきゃ!」

気付けば、三時間ほど軽く過ぎていて、大慌ての二人であった。

「ゆーき！ お前はとりあえず、晩飯の支度を頼む！ 俺は、さつさと掃除機かけちまうから！」

「分かった！」
別に急ぐ必要もないのだが、何故か潤一は切迫感に追われて、大急ぎで掃除を済ませていった。結局、荷物の移動含めて、五分もかからなかった。

「よっしゃ、終わった……！」

「ボクも急がなきゃ……！」

「いや、待てゆーき。よくよく考えて見れば、慌てる必要はない。多少晩飯の時間がズレこむだけだ」

「でも先生、お腹空いてるよね……？」

「病院じゃあるまいし、定刻きっちりでないダメ、なんてこたあないよ。少しの辛抱だ」

「だったらいいんだけど……！」

「それに、無駄に慌てて、ゆーきの手元が狂って、手でも怪我したらどうする？ 痛いのは嫌だろ？」

「う、それもそうだね……！」

怪我をしている自分を想像しているのか、ゆーきの動きが止まる。「俺は慌てない。だから、ゆーきもいつものペースでやればいい」

「……うん、分かった！」

やがて、ようやく自分の中で納得がいったのか、ゆーきは、いつもの調子を取り戻していった。

「どれぐらいで出来そうだ？」

「今、にんじんと干ししいたけを、刻み終わったところ。煮物だから、一時間ぐらいかかるかな……？」

「ん、分かった。じゃあ、俺は自分の部屋にいるからな。出来上がったら言ってくれ」

「はい。了解です」

軽い調子のゆーきの返事。潤一は、それを聞いてから、自室にて、再度忘れられていたマンガ類を読みふけていった……。

「先生、できたよー！」

「お？ 案外早かったじゃないか？」

「そうでもないよ？ きつちり一時間弱かかったし」

「そうか？ まあいいや。んじゃ、持ってきてくれ」

「はい」

ゆーきが、夕食を載せた盆を持ってくる。

どれも、今まさにできたて！ という自己主張をして、見た目にも美味そうだった。

「おおっ……！」

本日二回目となる、潤一の感嘆の声。あり合わせで作ったブランチとは違い、きちんと食材を買って準備した分、一層手が込んでいた。

「ああ、コメと主菜と、味噌汁がある……」

つやつやとした炒り豆腐に、まずは目がとらわれる。甘辛い匂いが漂い、潤一の胃袋が唸りを上げる。

「早速食うぜ！ いったただきまーすっ！」

「ボクも、いただきまーすっ！」

二人揃って、まずは炒り豆腐に手を付ける。

「うむっ……！ 美味いっ……！」

「もぐもぐ……！ 我ながら、上出来！」

こつてりとした豚ミンチの脂が、出汁と醤油に緩和され、口の中で、良い感じの旨味のハーモニーを奏でる。脇に回ったにんじんと、干しいいたけの味わいもナイスだった。

「こりゃ、ご飯が進むなあ……！」

「ありがと♪」

続けて、味噌汁に手を付ける。具は、ほうれん草と薄揚げだった。

「うむっ……！」

一口飲んで、潤一はさらに感嘆の声を上げた。いりこの出汁の効き具合、味噌のバランス、全てが満点で、コンビニで買うインスタ

ントなど、足元にも及ばない出来だ。

「こんなに手の込んだ味噌汁、実家に帰らないと飲めないと思ってたよ……」

「おかわり、あるからね？」

「ああ。しかし、何杯でも飲めそうだな、これ……」

「作った甲斐があったなあ♪」

とても美味なる主菜と汁物で、潤一の箸は非常に進んだ。ご飯は、二回おかわりした。潤一自身、「俺って、こんなに食欲あったんだ」と驚くほどだった。

「げふうっ……もう食えない……。ごちそうさんっ……！」

「ボクもごちそうさまーっ！ いっぱい食べてもらえて、嬉しかったなあ♪」

実は、ゆーきも潤一に負けず劣らず、よく食べた。仮に、料理したのがゆーき以外の第三者だとしても、ゆーきの食べっぷりを見れば、「ああ、甲斐があった」とほっこりすること間違いなしであるほどに。

「先生、お茶淹れよっか？ 熱い緑茶でいい？」

「おう、頼む」

食器を下げていくゆーき。その後姿……ゆーきが『女の子』であ

ることをはつきりと示す、丸い腰からお尻にかけての、ぷりぷりしたライン……を見て、潤一は、不意によこしまな気分にとらわれた。「（もう夜、だよなあ……）」

潤一も、朝のゆーきとのやり取りを忘れたわけではない。『夜になつたら、お前を抱こう』という約束だ。朝、獣欲にガツチリとかけた理性の鎖が、少しずつ弾け飛んでいく。

「（いや、忘れるな、俺！ 女の子は壊れ物なんだぞ……！）」

隙あらば暴走しようとする獣欲をなだめつつ、潤一は、いつこの話を切り出すか、迷っていた。

「はい先生、お茶だよ」

「……ん？ あ、ああ。ありがとう……」

そんなことを考えているうちに、ゆーきが、熱い緑茶を淹れて戻ってきた。ひとまず、それを飲む。

「はあつ、美味い……」

「美味しいよねえ……」

……俺の顔は、今、どんな風にゆーきに見えているんだろう？ 湯のみに映り込む自分の顔を見て、潤一は、そんなことを考えていた。

「……」
「……」
「……」
「……」

しばらく、お互い黙ってお茶を飲む。潤一は、あえてゆーきと視線を交えないことにした。やがて……

「あ、あの……先生？」

「うん？」

「夜に……なっちゃった、よね……」

「……だな」

「朝の話……覚えて、る……？」

「……忘れるわけないだろ」

「ボクの気持ちも、大分落ち着いたんだ。だから……」

おずおずもぞもぞと、言葉をこもらせるゆーき。潤一は、ゆーきの方からこの話題に触れてくれて、ラッキーだな……と、少しだけ思った。

「……いいんだな？」

「うん……！」

はつきりとした決意の滲む答えに、潤一は、もう何も言おうとしなかった。覚悟が固まったなら、それでいい、と。

「じゃあ、どっちの部屋がいい？」

「え、えつと……この、先生の部屋で！」

「分かった」

潤一は、すつ……と立ち上がり、部屋に布団を敷いた。そこで気

がついた。

「へい、いかんっ……！　これじゃまるで、死刑の執行人だ……！」

ゆーきの初体験が、こんなに殺伐としていいのか？　下手すりゃトラウマものだぞ？　潤一の良心が、警鐘を鳴らす。その音で、

潤一は我に返った。

「……ん、んん、おほんっ！　ゆーきよ、もうちよつとりラックスしようか？」

「はへ？　あ、うん……？」

「ん、まだ固いなあ……うりやつ！」

わざとおどけて言っつて、潤一は、ゆーきの脇腹をくすぐりにかかった！

「きやはっ!?　あはっ、あはははっ!!　せっ、先生っ！　くすぐつた……あ、ああっ、んあっ、くすぐつたいよおっ……!!」

「緊張してないかあ？」

「きやはふっ、ふはっ、ひやはあっ！　し、してないっ！　も、もうっ、どっかに飛んでっちゃったあっ！　あははははっ!!」

「ならよしっ！」

「はーっ、はああーっ、あ、ふわあ……」
懸命に、呼吸を整えるゆーき。やがて、ようやく落ち着いたよう

だった。

「こっち来い、ゆーき」

「うん……」

そして、潤一は、ゆーきを呼ぶと……

「目、閉じてろ……」

「ん……」

言われるまま、すっ……と目を閉じるゆーき。潤一は、彼女のあ

ごを、くつと上げて……

「んちゅ……ん、ああ……」

そつと、唇を重ねた。

「……ッ……！」

潤一は、予想外のハプニングに、とても動揺していた。柔らかかった。甘かった。潤一の予想以上に、ゆーきの唇は、最上級の水菓子のようになり、とてつもなく甘く、柔らかかった。それは、もう、唇から脳天まで、稲光が駆け抜けるほどだった。

「んむちゅっ、ちゆるむっ、あふあ……はむっ、んちゅっ、しえんしえ……」

いつしか、一心にゆーきの唇を貪る潤一。キスだけでこれほど昂ぶるなんて、まさに予想外だった。

「ふむちゅうっ、んちゆるむっ、はあふ……んくっ、ちゅびいっ、

んちゆるっ、ちゅう……は、あ、む……」

「……ツツ……！」

無心で、ゆーきの唇を貪り続ける。参った。こうも気持ちいいと、抑えが効かないっ……！ 最初は軽い挨拶程度で済まそうと思ってたのに……！ 潤一が悔やめども、もはや後には引けなかった。

「もむうっ、んぢゆるっ、ぢゆるむうっ、んっちゅ、ちゅぴっ、んちゅうううっ、ふむ、んは、あ、はあぶ……」

「……ツツ……！」

「んぱ……ふわはあっ……！ はーっ、はあーっ、あはあっ……！！」

ようやく、潤一の唇が離れた。ゆーきにとってのファーストキスは、とんでもなく濃厚なものになってしまった。

「するぞ、ゆーき……」

「はい……」

キスだけですっかりのぼせてしまったゆーきが、のろのろと、布団に横たわる。その目は熱く潤み、もはや、『ケダモノに食われるのを待つ、皿の上の美味しいごちそう』状態である。

「（……いや、焦るな、焦るな俺っ……！！）」

自分の中の『ケダモノ』を必死で制御しつつ、潤一は、そっとゆーきに覆いかぶさり、彼女のシャツをめくり上げた。

「ああ……」

容姿不相応に、ねっとり熱く悩ましげな吐息を吐くゆーき。それがまた、潤一の興奮を煽る。

シャツをめくると、そこには、慎ましやかな双丘があった。そして、触れていく。

「ひやうっ……！ あ、んんっ……！」

サイズこそ抑えめだが、感度は抜群のようだ。周りの肌より一層柔らかい感触。ふにふにとこねるように揉んでいくと、ゆーきの声は、さらに悩ましげになった。

「んああっ、ひや、あううんっ……！ んひやっ、ひやはあっ、あ、あふうっ……！」

ゆーきは、順調に感じてくれているようだった。ぴくん、ぴくん……と全身をわななかせ、潤一が与える快感に、じわじわと浸かっているらしい。

「(ゆっくり、ゆっくり……)」

潤一は、暴走しないように、ゆーきに恐怖を与えないように、慎重に、そして丹念に胸を愛撫していった。

「あはあっ、ひやふわっ、あ、あんっ！ つく……んんっ！ んはあっ、あ、あううっ……ビリビリ、するよう……」

「痛かったりするか？」

「んあ、ふわあ……だいじよぶ、だよう……」

「じゃあ、ここはどうかな……？」

潤一の指が、双丘の頂で慎ましく自己主張している、乳首に触れた。

「きやはあっ?! んひやっ、あひやううっ! んいっ、いああっ!

しびっ、しびっ、びあっ、しびれっ、しびれるううっ……!!」

「段々強くしていくからな……」

「んひやうっ! ひやはあっ! あひやはあっ、ふわっ、ん、んい

いっ! いあっ、いひああっ! ん、ああんっ、あううんっ……

!!」

ゆーきの反応は、とても分かり易かった。敏感な部分を責められ、さつきよりも一層嬌声を上げて、びくびくと全身をわななかせた。

「んひやううっ?! ああっ、そんなんっ、そんなんこりこりしたらあっ

……! きひっ、気持ちいいっ、なんか変っ……!」

「全然変じゃないよ。至って普通の反応さ……」

強い快感に戸惑うゆーきをなだめ、潤一は、さらに彼女の乳首を責め立てていった。

「んああっ! あひっ、はひううっ! んきやっ、きやはあっ!

んひうっ、ひあっ、いいあああっ……!!」

「痛かったら、いつでも言えよ……?」

「んはあっ、あ、だいじよぶ…だ、ようっ！ 痛くないっ、気持よくてえっ…胸え…いつばい痺れてえ…!!」

「いっつか、ゆーきの乳首は痛ましいほど勃起し、くりくりとつまむ潤一の指を、押し戻さん程になっていた。」

「じゃあ、こういうのはどうだ…?」

「え…? あ、ひゃんっ!」

潤一が、ゆーきの乳首を口に含む。こりりとしたその突起を、甘噛みしながら、舌で転がしていく。

「くふうんっ！ んふっ、んふわあっ！ ひゃひっ、ひは…あ、

ああんっ！ んっく…くひいっ、い、いああっ、ねろねろしてて

えっ、なんか、もつともつとビリビリするようっ…!!」

「…!!」

潤一は、黙ってゆーきの乳首を責めていく。もちろん、空いてい

る手で、もう片方の乳首をコリコリと転がしていくことも忘れない。

「んくふうっ！ かふっ、んひううっ！ んいっ、いあああっ！

あひゃっ、は…あんっ！ んっく…くひっ、い、あ、あ、あ、

あっ！ あはっ、ふわはっ、ひゃ…ああんっ…!! あんっ!!

んんんっ…!!」

初めてでここまで感じてくれている彼女に、たまらない愛おしさを

感じていた。

「反対側も吸うぞ……」

「ひゃうっ……!!」

先ほどは左だったため、今度は右の乳首に移る。左は、潤一の唾液で、てらてらとぬめり光っていた。そのぬめりを利用して、もう一段調子よく、指を遊ばせる。

「んひゃっ、いああっ、あ、あうんっ！　んっく……うあ、うあ
ああっ、あ、あうんっ！　んぐ……くひいっ！　いひうっ、あ、
あいいっ、いいっ、いいようっ……!!」

『いい』と、熱い声でゆーきが言った。それが、潤一の安堵を誘う。
「あうんっ！　んくふっ、くひうっ、いあ、あ、ああんっ！　気
持……いいっ！　すご、お、おあっ、いっばい……痺れ、てえ
っ……!!」

もはや、ゆーきはどっぷりと快感に浸っているようだ。潤一は、
自分がなんだか、『女の子』という名前の楽器を演奏しているよう
な錯覚にとらわれていた。

「ぷはあっ……!!」

「あっ……？　や、やめちゃあ……やだあ……」

乳首から顔を離れた潤一に、熱く艶かしい抗議の声が聞こえた。
しかし、潤一にとっては、まだまだ『前菜』である。

「下、脱がすぞ……」

「あ、うん……」

ジーパンを緩め、するりと脱がしていく。ちよつと地味目のシヨーツが露わになり……潤一は、また少し嬉しくなった。

「（よしっ……！）」

何を持って『よし』とするか？ それは、ゆーきのはいているシヨーツに、シミを見つけたからだ。多少なりとも濡れてくれている。それがただ、潤一には嬉しかった。

「シヨーツも脱がすぞ……」

「ん、うん……恥ずかしいなあ……」

顔を覆って羞恥を訴えるゆーきが、たまらなく可愛く、愛おしい。潤一は、荒ぶる鼻息で、ゆーきのシヨーツに手をかけた。

「ああああ……」

シヨーツを脱がすと、そこは、じつとりとした無毛の翳だった。むわあ……と甘酸っぱい匂いを発散し、オスを惹きつけてやまない秘境だった。

「そ、そんなにまじまじ見つめないでよう……ボク、恥ずかしすぎてどうにかなつちやいそう……」

「綺麗だな、ゆーき。すごく綺麗だ」

「ふえ……？　そ、そう……？　」

率直な感想を述べる潤一に、戸惑ったようなゆーき。対照的であった。

「もつと濡らそうな……」

「は、はい……ああつ!? ん、んああつ!!」

ぬうつと手を伸ばし、ゆーきの秘部に触れる。ぬるり……とした火照りが感じられ、どの箇所よりも繊細な柔らかさであることを、ひしひしと潤一に伝えていた。揃えた指で、むにむにと全体を揉んでいく。

「んきやはあつ!! きやはつ、あ、あふうわあつ、きやはつ、ひはあつ!! んいっ、いあはつ、はふ……ん、あ、ああああつ!!」

「気持ちいいか?」

「うんっ、んふんんっ!! 気持ちいいっ! 胸よりもつとつ! 背中がぞくぞくビリビリしてえええっ!! きひっ、か、あふあつ……感じ、りゆうっ……!!」

ぬち、ぬち、ぬちやり……と、粘った音が聞こえていた。潤一が、秘部全体をこね上げる度に、ゆーきの奥から、新たな蜜が溢れ出し

ているのが、はつきりと分かっていた。
「んひゃう、ひゅいっ、いひゅうっ! かっ、くあ……あ、あいいっ! いうっ、いひううっ!! 感じてるっ! ボクう……いっばい感じてるうううっ!!」

くなくなど腰をもぞつかせて、ゆーきは、さらに甘い声を上げる。秘部の熱は、潤一が火傷するんじゃないかと思うほどに熱く、甘酸っぱい匂いは、ますます強くなっていた。

「もつと、もつとほぐそうな……」

「いあっ……！ いはああああっ！！ あいっ、いんっ！ いひいんっ！！ ひうっ、あ……あいいいっ、いひあっ、はううっ……あ、あひいっ！！」

ゆーきの悶え方と、溢れる蜜の量は、正比例グラフで上昇している。

「おつと……！！」

「あうんっ……！！」

あまりにゆーきの秘部がぬめるせいで、愛撫している潤一の指が、はずみでつるりと膣の中に潜り込んでしまった。

「（うお、熱いっ……！！）」

灼熱。その形容がぴったりだった。ゆーきの中は、もはやとろとろにほぐれ、いつでも挿入できるように思われた。

「どれ……？」

「くひっ……！！？ い、いあはあああっ！！」

潤一が中指をうごめかすと、入り口付近に、ゆーきの純血の証がせり出していた。その奥に指を深く潜らせると、ねっとりしたヒ

だが、いっせいに潤一の指に絡みついてくる。

「（ゆ、指が溶けそうだった……!!）」

潤一が、そんな錯覚に陥っても、それは無理の無い話だった。それほどまでに、ゆーきの中は熱く、蕩けていた。

「んあんっ、んはあんっ！　いうっ……あ、や、やあつ……！　せ、せんせつ……!!　そ、そんなくちゆくちゆ音立てちゃっ……！　は、恥ずかしっ……!!」

「可愛いな、ゆーき。すごく可愛い……」

羞恥に力なく頭を振るゆーきだが、その悩ましきは、さらに潤一の愛撫をねだっているようにしか見えなかった。さらに、卑猥な水音を立て、潤一は、ゆーきをかき混ぜ続ける。

「ふわあああっ!!　あっ、あはあんっ!!　んくふうっ、くひ、いひうああっ!!　すごっ、熱いっ、アソコが熱いよおおっ!!　ボクう……いっばい溢れてえ……恥ずかしすぎるけど……けどお……」

「けど、なんだ？」

「感じ、てるう……。先生の指、感じてるんだあ……」

「くくくっ!!」

今にも泣きそうな程潤んだ目で、潤一を真っ直ぐに見つめて、濡れた唇で訴えられると……もう、いい加減潤一の方が、辛抱たまらなくなっていた。

「……」

「ふわはあっ……ぬ、抜いちやうのお……？」

指を抜くと、太い愛液の糸が、ゆーきの秘部と潤一の指の間を渡った。もう十分だろう。潤一は確信した。

「――入れるぞ、ゆーき」

「……ああっ……そんな、大きい……!?」

もはや痛ましいほど勃起している潤一の怒張を見て、ゆーきが息を呑む。知識はあっても、見るのは初めてだから、その反応は予想できるものだった。

「せんせ……入るの？　そんな大きな……」

「大丈夫だよ。ゆーきの大事なところは、もうすっかり濡れ切ってる。スムーズに入るはずだ」

「そ、そうなんだ？」

「ああ。でも、初めてだから、ちよっと痛いかも知れない。耐えられなかったら、言えよ？」

「……っ……。ううん、ボク、頑張る！　どれぐらい痛いかならないけど、頑張って我慢する！」

「よしよし、いい子だ……」

「んあっ……？　あ、んちゆう……」

潤一は、健気なゆーきの頭をそっと撫で、優しいキスをした。

「じゃあ、行くぞ……」

「うんっ……！」

姿勢を整え、張り詰めた怒張の先端を、ゆーきの入り口に浸す。ぴちやり……と、粘液質な音がした。

そして……

「それっ……!!」

「んぐっ……!!」

潤一が、腰を落としていく。すぐに、ゆーきの純潔の証……処女膜に、行く手を阻まれる。それを、やや強引にこじ開けていく。

「きひっ……!?! いづっ、うあ、ああああっ!?! 痛、いっ……!!」

ずぶずぶと先端を進めていくと、ぷつり、ぷつ、ぷつ……と、何かの弾けるような感触がある。まさに、破瓜の瞬間だった。

「痛いっ! 痛いっ……!! くひっ、いづ、うあああ、あぐむっ、む、んんんっ……!!」

「くっ……どうだ? 耐えられそうか? 無理はするなよっ……」

「むぐ、んぬぬうっ……!! だはっ、だいじょおぶ……だよっ……!!」

どこまでも健気な彼女に、潤一は、感心すると同時に、ますますゆーきが愛おしく思えた。

「ふぐっ、んふぐっ、むぬぬぬうっ……いづあっ、あ、あぐむっ……
んあ、んきひあああ……!!」

「もう少しだっ! もう少しっ……!!」

潤一の怒張は、三分の二程が埋没していた。繋ぎ目からは、純潔の証の赤が、つうつと滴っている。

「むぐっ、んむぐっ、くひっ、いづうあっ、あ、あぎいっ……!!」

「……よしっ! 全部入ったぞ!」

「くくくっ、ぶはあっ!! ぜえーは、せええーはっ、はひっ、全部、入っちゃった、の……?」

「ああ。よく頑張ったな、ゆーき」

「ふわあ……」

「ん? どうした?」

「うん……。まだ痛くてしようがないけど……これで、ボクと先生、一つになったんだなあって思うと……すごく、嬉しくて……あは……

泣いちゃいそう……」

「……ゆーきよ、お前反則だぞ? そんなこと言われたら、もらい

泣きしそうじゃないか」

「えへへ……ごめんなさい……」

実際、ゆーきの目尻からは、大粒の涙が一滴、ほろり……とこぼれ落ちていた。ここまで健気で愛らしい様を見せつけられては、確

かに反則であった。

「しばらく、このままでいるからな？」

「でも……先生は、動いたほうが気持ちいいんだよね……？」

「バカ。痛くてしょうがない、って相手が言ってるのに、無理やり出来るか」

「ボク、頑張るよ？」

「そういう問題じゃない。痛みがましになったら言ってくれ。様子を見ながら動くから」

「はあい……。優しいなあ、先生……」

「そこで、幸せそうに微笑むな。反則その二だ」

「えー？　だってボク、今、間違いなく幸せだからあ……」

「……なおのこと、タチが悪いわ、こいつめ……！」

「……てっ……？」

潤一は、照れ隠しの意味も込めて、この愛しすぎる彼女のおでこを、軽くデコピンした。

「ふわあっ……」

「……」

しばらく、無言の間が流れる。

潤一は、結構必死だった。なぜなら、初めて異性を受け入れたゆきの中は、予想通り相当にきつく、また、灼ける熱もはるかに感

じ、ぬめりも相まって、怒張が溶けそうな感覚に陥っていた。

「（こりや、動いたら、あんまり持たないかもな……）」

『いっばいっばい』。まさに、今の潤一を表すのに、ぴったりな言葉であった。

「ん……あ……」

「どうした？」

「あ、うんう……。だいぶ、痛いのがマシになって来たかもお……」

「本当か？」

「んう……大丈夫。先生、動いてもいいよお……」

しばらくして、ゆーきが、熱い吐息と共に言った。

「ボクう……先生に、もっと気持ちよくなってもらいたいからあ……」

「……反則その三だ、こいつ……！」

どこまでも健気なゆーきを見て、潤一は、鼻の奥に酸っぱいものさえ感じていた。

「じゃあ、いくぞ……！」

「うん……あ、んんんっ！」

そして、ずるり……と、潤一は緩やかな抽送を開始した。
「んくっ……ふは、んああっ！　ぬむっ……あ、あいいっ……！」

こすれ、てえっ……！！」

十分に濡れているお陰で、抽送はスムーズだった。ゆっくり、加減を見ながら、潤一は、ゆーきをかき混ぜていく。

「んはうっ、あ、あふわああっ！　すご、奥までえ……届いてるう……！！」

「（くうっ……！！）」

潤一は、順調に擦り上げられる怒張の快感で、せり上がってくるものを抑えるのに必死だった。気を抜けば出る。素直に果ててもいいのだが、もう少し、ゆーきの胎内の感触を味わっていたかった。「はぐっ、あ、あうんっ……！！　んぐ、あ、ああんっ……！！　背筋が、ぞくぞくするよう……！！　痛いのが、どんどん引いてってえ……！！」

ゆーきの方も、大分慣れてきたようだ。苦しさが紛れていた声が和らぎ、はつきりとした嬌声を上げている。

「（もうちよつと、もうちよつと……！！）」

持たせたい。切実に潤一は思った。しかし、願いと裏腹に、絡み付く粘膜がもたらす、じりっ、じりっ、と、奥からこみ上がってくる射精欲には、もう勝てそうになかった。

「（ラストスパートッ……！！）」

「んあああっ！　あんっ、んぐ……は、うはああっ！　あんっ、あ

はあんっ！ んぐむっ……すご、いいいっ……!!」

ピッチを上げた抽送に、ゆーきはますます悶える。まさに、ラストパートだった。

「あふあっ……!! 先生のっ！ ボクの中でっ！ もっと大きくなっ……!!」

「ゆーき……出すぞっ……!!」

「んはああっっ！ 出るのっ!! 出してっ！ 中がいいのっ！ 先生をっ！ いっぱい感じさせてえっ!!」

「むぐっ、ぬ……おああああっっ!!」

とうとう、潤一の中の理性が吹き飛び、彼はゆーきの中で盛大に射精した。

「ふわああああっ!! 出てるっ!! 先生のっ！ ボクの中でっ！

びしゃあっ……すご、いいい……」

「はあっ、はああっ、あ、うおお……」

「はへ、ひあ、んはああっ……まだ出てるう……ポンプみたいで、すごいよお……すごいのお……」

たっぷりとした射精に、ゆーきは、全身をわななかせる。

「よっ、と……」

ずるり……と、ゆーきの中から怒張を引き抜く。すると、ぽっかり空いたゆーきの膣口から、破瓜の血と、精液の混じった、ピンク

色の粘液が、ごぼり……と溢れ出てきた……。

「はふうくく……すごかったあ……」

「シャワー、浴びたほうがいいんじゃないか？」

「うん。でも、もうちよつと余韻に浸りたいかなあ……？」

そして、事後。簡単に後始末を終えた二人は、一枚の布団に寝転がり、余韻の時間を味わっていた。

「これでボク、先生のものになったんだね……」

「ま、まあ……そうなる、かな……？」

「嬉しかったよ、先生。ボク、今とっても幸せ！」

「そっか……」

「これからも、いっぱいいっぱい愛してね？」

「ん、ああ……」

本当に幸せそうな笑顔を見せるゆーきに、潤一は、恥ずかしさでどうにかなりそうだった。

「（これから、か……）」

この恋人との、未来を考える。それは無限の光に満ちているようで、潤一は、眩しいな、と思った。